

「国文学」誌、第一〇〇号の刊行に寄せて

中野 眞作

生きて第一〇〇号を落手出来ることを喜びとします。

関西大学では昭和三十三年四月、戦後の教育改革を受けていち早く新制大学に転換され、文学部国文学科が発足しました。旧制度からの移行によって、私は三年次への編入生となり、昭和二十五年三月、国文学科第一期生として卒業しました。同年六月、新制大学院生として「国文学」第一号（昭和二十五年五月十日発行）を手に入れました。今は表紙の色こそ黄色に変わっていますが遠い思い出です。

昭和二十五年十一月二十五日、国文学会の研究発表会で『好色一代女』老女の隠れ家の挿絵について』と題して発表しました。「国文学」第六号（昭和二十七年二月）に「若い人々に期待しようとする趣旨から」としてお取り上げ頂いた。研究の第一歩となったのですが、顧みて汗顔の至りです。

平成二十五年九月、「京都近世小説研究会」特別企画・「ワーキショップ 西鶴をどう読むか」で、南陽子氏は、『好色一代女』巻一の一における『一代女』像の形象について』と題した発表で、「一代女」の典拠について「本文中の『恋慕の詩』は小

歌を指し、挿絵の楽器が尺八でなく一節切であることから『遊仙窟』典拠説に疑問を投げかけた中野眞作の論文を援用し、当代性・同時代風俗との繋がりを重視する読みを提示した。」と、飯倉洋一氏の報告（リポート笠間 55）があった。歳月を経ても拙稿が生きていたことを知りました。

爾来、六十有余年、恩師の方々も既に旅立たれました。共に学び研鑽した同輩、競い合った後輩たちも亡くなり、その悲しみは今も消え返ることはありません。しかし、「国文学」誌に掲載された優れた多くの論考は今も生きて語りかけてくれます。余日消光の身として残された時間を「狂歌の書誌的研究」の作業をするに大いなる励みになっております。

近年、多くの大学で国文学科が廃学科になっております。したがって、同時に学会誌も廃刊になっていきます。思えば、実学偏重、人文科学軽視など時の流れとは申せ断腸の思いです。「自国の文化が語れない哀れな日本人」が増えつつある現状を見るに、国際人の養成を目指す日本の教育の在り方を考えさせられます。幸い、「国文学」誌は、代々の編集者のご努力で第一〇〇号を迎えることができましたことに感謝いたしております。今後の「国文学」誌の発展を願ってやみません。

（なかの しんさく）